様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：２４５０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４２６８

研究課題名（和文）生成的対話に基づくコミュニティエンパワメントに関する基盤的研究

研究課題名（英文）The research about the community empowerment through the generative dialogue

研究代表者
竹端　寛（Takebata, Hiroshi）

兵庫県立大学・環境人間学部・准教授

研究者番号：９０４１０３８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：コミュニティが持続可能で、豊かな支え合いが行われるためには、生成的対話が必要不可欠である。本研究ではこの視点に基づき、生成的対話がコミュニティや支援現場をどう変容に結びつけたのか、を調べた。その結果、他者の他者性を認め合う対話の中から、支援する・される、や調査する・される、の二項対立を越えた関係性やネットワークの相互変容が生じ、それがコミュニティを維持・発展させるエンパワメントに結びつくことが見えてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義としては、支援現場におけるアクターの動きのダイナミズムの記述可能性を模索出来たことである。従来のフィールド研究では、インタビューに基づく構造を描く研究が多かったが、本研究で検討したアクターネットワークセオリーを用いることにより、生成的対話から見いだされる構造化のダイナミズムを辿る道筋が見えてきた。そのことにより、コミュニティにおける相互変容プロセスとしてのエンパワメントの実態をより豊かに・深く記述することが出来うる素材が見つかった。

研究成果の概要（英文）：Generative dialogue is essential if communities are to be sustainable and supportive of each other in a rich way. Based on this perspective, we investigated how generative dialogue led to the transformation of communities and supportive relationship. We found that dialogues to understand the otherness of others led to the mutual transformation of relationships and networks beyond the dichotomy of supporters and users, and researcher and research target. This perspective leads to the concept of empowerment that sustains and develops communities.

研究分野：社会福祉学

キーワード：生成的対話　コミュニティエンパワメント　ポリフォニー　傷つきやすさ　アクターネットワークセオリー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

これまで研究代表者が単独で行っていた支援者エンパワメントの研究の中で、対象者の内在的論理に寄り添い、膠着した状態を変え、対象者の福祉的ニーズの充足のみならず、対象者や対象地域のエンパワメントにつなげる支援を実践してきた先達たちは、動的ダイナミズムを重視した物語生成・構築能力を持っていることがわかってきた。その際、生成的な対話が、膠着状態を乗り越える為の鍵となることが明らかになってきた。

そこで本研究では、上記の研究結果を踏まえ、コミュニティのエンパワメントにおいて生成的対話が果たす機能や役割を整理すると共に、今後の臨床実践に還元する為のモデル提示も行うことになった。

２．研究の目的

エンパワメントされたコミュニティにおいては、生成的な対話が不可欠である。だが、それがどのような動的ダイナミズムの中で機能しているのか、明確ではない。本研究では、生成的な対話とエンパワメントを結びつけ、地域変革に必要な方法論やモデルを提示する事を目標とする。具体的には次の三つを目指した。

(1)コミュニティエンパワメントのプロセスや達成に関する方法論レベルの解明を目指す。
(2)コミュニティエンパワメントにおいて求められる生成的対話とは何か、を整理する。
(3)地域福祉の現場において、上記重視した実践をする為の援助者の変容課題を提起する。

３．研究の方法

生成的な対話に基づくコミュニティエンパワメントに関して、研究期間内に上記 3 つのテーマについて具体的に以下のような課題設定を行った。

（1）コミュニティエンパワメントがどのようにして可能なのか、どのような方法論によってその条件が達成できるのか、の方法論レベルの解明を目指す。
→コミュニティエンパワメントについては、各領域において先行研究や実践の蓄積はあるが、方法論レベルでの解明が少ない。そこで、どのような協働作業の中でコミュニティエンパワメントが達成されたかを領域横断的に検討し、地域福祉実践に還元できる視座や方法論を提示する。

（2）コミュニティエンパワメントにおいて求められる生成的対話とは何か、を整理する。
→対象者や対象地域の語りを引き出し、支援者やグループとの相互作用の中で、既存の認識枠組みが流動化し、生成的対話が動的に生み出されていく。そのプロセスを可視化・言語化することで、コミュニティエンパワメントにどのような生成的対話が必要不可欠か、を整理する。

（3）地域福祉の現場において、上記を重視した実践をする為の援助者の変容課題を提起する。
→コミュニティソーシャルワーカー（CSW）は全国的に増えているが、コミュニティエンパワメントや生成的対話を重視しているワーカーはまだ、少ない。①・②の整理を通じて、CSW の変容課題を整理し、実際に主体的な担い手として成長する方法論を提示することを最終目的とする。

これらの具体的なテーマを探索するためには研究代表者の単独研究では限界がある。そこで、地域社会学を専門として、イタリアや沖縄で国境研究を行う鈴木鉄忠と、ボランティア学や女子教育を専門として東北被災地支援を継続する高橋真央と学際的な研究班を組織し、上記の 3 つのテーマについて、多様な視点から切り込んでいく方法論も模索した。

４．研究成果

三つの研究目的に即して、成果を記述することとする。

（1）コミュニティエンパワメントのプロセスや達成に関する方法論レベルの解明を目指す

コミュニティや支援現場の抑圧的で無力化された（powerlessness）現実に対して、異議を唱え、現実を変えてきた先達がいる。「自由こそ治療だ」と唱えて、イタリアの精神病院廃絶への道を開いたフランコ・バザーリア。「入所施設はアブノーマルだ」と訴え、ノーマライゼーションの原理を整理し、世界中の知的障害者入所施設を脱施設化に導いたベンクト・ニィリエ。「識字教育は世界を批判的に分析することだ」と考えて『被抑圧者の教育学』を整理したパウロ・フレイレ。この三人の、同時代でありながら領域も方法も異なる 3 人が続けてきた生成的対話や、それに基づくコミュニティエンパワメントに繋がるプロセスも整理した（竹端 2018a）。

また反抑圧的ソーシャルワーク(Anti-Oppressive: AOP)の実態をカナダで調査し、対象者・地域の置かれた抑圧的な構造を批判的に意識化し、個別支援のみならず社会変革を志向した基盤教育・現場実践がなされていることを掴んだ。ソーシャルワーク専門職のグローバル定義の中で

謳われている「社会変革・社会開発・社会的結束の促進、および人々のエンパワメントと解放」を今後日本で実現するためには、AOP の視点が必要不可欠であることも整理できた。この内容については、2020 年度中に出版社から共著本として公刊する予定でもある。

（2）コミュニティエンパワメントにおいて求められる生成的対話とは何か、を整理する

2017 年に研究代表者の竹端は、オープンダイアローグの一つである未来語りのダイアローグ（Anticipation Dialogue: AD）のファシリテーター研修を受け、それ以来、様々なコミュニティ実践の現場での対話的場作りのファシリテーションを実践者として行ってきた。その中で、「何かを決定するための対話」ではない、「お互いの違いを理解するための対話」こそ不可欠ではないか、を理解し始めた。これまでは生成的対話を通じて「意見を一致させる」ことが必要だと思い込んでいた。だが、AD を学び、ファシリテーターとして実践するなかで、「他者の他者性」を重視し、お互いの違いを理解し合うことこそが、意見を一致させなくても、コミュニティにおける連帯や結束に結びつくことが整理できてきた。

その上で、2019 年度にアクターネットワークセオリー（ANT）と出会ったことが、研究班における生成的対話の理解を劇的に向上させる。これまでは生成的対話とは、創発(emergence)概念に代表されるように、無から有を生み出すことだと認識してきた。だが、ANT においては、「翻訳→交雑→徴集→動員→転置」というプロセスの中で、既知の内容が未知の内容に組み替えられていく。生成的対話における「翻訳→交雑→徴集→動員→転置」のプロセスを整理することで、実際にコミュニティエンパワメントが行われた現場における生成的対話のアクターの結びつきを整理することも可能になる。この視点から、鈴木はイタリアでの学生たちのフィールドワークにおける生成的対話を、高橋は東北の被災地における学生たちのフィールドワークにおける生成的対話を、それぞれ ANT で辿り直す論文を書き上げた(鈴木 2020，高橋 2020)。

（3）地域福祉の現場において、上記を重視した実践をする為の援助者の変容課題を提起する。

支援者が社会起業家精神を持って新たな何かを生成するには、安心安全な場における自己開示や小さな試行錯誤が必要不可欠である。それは、自らや対象者への抑圧性に気づくと共に、抑圧的ではなく、自他を解き放つ実践をしていく必要性がある。竹端他（2017）の中では、岡山の「『無理しない』地域づくりの学校」という実践現場を素材に、どのような関わり合いのなかで、支援する・される、を越えた相互変容の可能性があるのか、を分析することができた。

また、反抑圧的な実践をソーシャルワークにおいて展開するためには、ソーシャルワーカーが「防衛的実践者」ではなく「批判的実践者」に変容する必要がある。これは、先述のソーシャルワーク専門職のグローバル定義にも合致する。そこから、支援者エンパワメントにおける「批判的実践者」の視点の重要性についても整理することが出来た（竹端 2018b)。

＜引用文献＞

鈴木鉄忠　2020　「「本物を見た！」―「真正性」と「観光のまなざし」の間の海外体験学習」共愛学園前橋国際大学論集(20) 177-198

高橋真央　2020　「学生が被災地から学んだものとは－アクターネットワーク理論から考える－」甲南女子大学研究紀要Ⅰ（56）17-28

竹端寛　2018a　『「当たり前」をひっくり返す―バザーリア・ニィリエ・フレイレの奏でた革命』現代書館

竹端寛　2018b　「ソーシャルワーカーの社会学に向けて」福祉社会学研究（15）49-65

竹端寛、尾野寛明、西村洋己編、2017　『「無理しない」地域づくりの学校―私からはじまるコミュニティーワーク』ミネルヴァ書房

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 高橋真央	４．巻 19
２．論文標題 フィールドから見えた『ボランティア』から離れた存在の可能性	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ボランティア学研究	６．最初と最後の頁 35-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高橋真央	４．巻 55
２．論文標題 女性の高等教育機関としての女子大学の変遷～過去から現在、そして未来へ～	５．発行年 2019年
３．雑誌名 甲南女子大学研究紀要Ⅰ	６．最初と最後の頁 29－42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木鉄忠	４．巻 21
２．論文標題 惑星社会における「日常生活の網の目」の探求――“うごきのそのものへ”にむけた方法論の検討	５．発行年 2017年
３．雑誌名 社会科学研究所年報	６．最初と最後の頁 97-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋真央	４．巻 18
２．論文標題 神戸からはじまったボランティア学～研究と実践への還元～	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ボランティア学研究	６．最初と最後の頁 53-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹端寛	4．巻 15
2．論文標題 ソーシャルワーカーの社会学に向けて	5．発行年 2018年
3．雑誌名 福祉社会学研究	6．最初と最後の頁 49－65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木鉄忠	4．巻 20
2．論文標題 「本物を見た！」―「真正性」と「観光のまなざし」の間の海外体験学習	5．発行年 2020年
3．雑誌名 共愛学園前橋国際大学論集	6．最初と最後の頁 177-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高橋真央	4．巻 56
2．論文標題 学生が被災地から学んだものとは－アクターネットワーク理論から考える－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 甲南女子大学研究紀要Ⅰ	6．最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 高橋真央
2．発表標題 対話とボランティア学
3．学会等名 国際ボランティア学会第2回ボランティア学連続セミナー
4．発表年 2018年

１．発表者名 山口洋典・髙橋真央・桑名恵・玉城直美・阿部健一・竹端寛
２．発表標題 企画セッション「ボランティア学の（未来）を読む」
３．学会等名 国際ボランティア学会　第20回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹端寛
２．発表標題 ソーシャルワーカーの社会学的分析に向けて
３．学会等名 福祉社会学会第15回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 鈴木鉄忠
２．発表標題 身体は社会運動の拠点になりうるか―A.メルッチの惑星社会論をてがかりに
３．学会等名 日本社会学会第90回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 髙橋真央
２．発表標題 学生ボランティアがもたらしたもの～東日本大震災復興支援活動における被災地との関わりから～
３．学会等名 国際ボランティア学会第19回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

1．著者名 竹端　寛	4．発行年 2018年
2．出版社 現代書館	5．総ページ数 248
3．書名 「当たり前」をひっくり返す	

1．著者名 新原 道信	4．発行年 2019年
2．出版社 中央大学出版部	5．総ページ数 491
3．書名 “臨場・臨床の智”の工房	

1．著者名 岡山県社会福祉協議会、竹端　寛、尾野　寛明、西村　洋己	4．発行年 2017年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 244
3．書名 「無理しない」地域づくりの学校	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　鉄忠 (Suzuki Tetsutada) (20726046)	共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・講師 (32303)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高橋　真央 (Takahashi Mao) (50401609)	甲南女子大学・文学部・准教授 (34507)	